1.

「どうしてこうなっちゃったんだろ、俺たち」

さほど大きくない四人がけのテーブルに、胸ポケットから取り出した煙草の箱を投げ置き、安物の四脚椅子に腰を投げ出すように腰掛けた。

暖かい日の光が差し込む部屋の中、彼女は何も言わぬまま、俺とは正反対の方向にある窓を向いている。解決の見えない問いかけに返ってくるのは、不愉快に唸る冷蔵庫の駆動音だけだった。

きっかけは些細な口喧嘩。最近お互いの仕事が上手くいかず、それが生活にも悪影響を及ぼしていた。多分二人とも、自分の中に積もり積もった苛立ちを吐き出してしまいたかったのだらう。

普段なら気に留めない小さな事に突っかかりたり嫌味を言ったりして、張り詰めた空気が我が家を支配する。間の悪いことにその時期が二人同時に到来してしまった。

笑って流せるようなことを取り上げて、八つ当たり気味に当り散らしあう風景がここ一ヶ月続いていた。数年吸い続けている煙草をくわえ、愛用のライターで火を付けると、ライターオイルの何とも言えない香りがかすかに鼻をつく。

明るく晴れた昼時の窓の外では、いつもと変わらない日常風景が広がっている。電車は定刻通りにレ-

ルを走り、オフィスでは会社員が春の陽気の中で新年度の業務を進めているのだろう。すぐ近くの市民公園からは、暇を持って余す大学生が夜を待てず、満開の桜の下で能天気にはしゃいでいる声が聞こえていた。大した思慮なくと遊び呆けられる環境を素直に羨ましく感じる。

肩が落ちるほどに深いため息がこぼれる。吐き出された白い煙は天井に近づくにつれ、空気に溶けるように消えていった。体内に取り込んだ不健康な充足感が肺を駆け巡り、穏やかな安堵感が体を満たしていく。

「お前は煙草が嫌いだったな。この一本で吸い納めだ、今だけは勘弁してくれや」
独り言のように吐き出した懇願もまた、音のない空間に吸い込まれるように衰微した。最後の一口を思い切り吸い込むと、まるで吹き戻しが戻ってくるような勢いでフィルターの前まで煙草は燃え尽きた。桜の開花は新たな生活の始まり。万人にあてはまるわけではないが、少なくとも俺の人生はその言葉通りに進んできた。良いか悪いかはわからないが、今年の春も新たな環境と付き合っていかなければならぬ。

短くなった吸殻を灰皿の底面に押し付け、もう一度深い深いため息をつく。オイルの香りはすでに空気にもぎれ、鼻先に戻るのは鉄のような香り。

数ヶ月前に彼女の趣味で購入した薄桃色の絨毯には、大小さまざまの赤黒い斑点が規則性なく散りばめられていた。

玄関の外が騒がしくなってきた。入り口のドアノブを乱暴に開けようとする音が、リビングまで響いてくる。どうやら開錠を忘れていたらしい。開けてやろうと思ったが、一度腰を下ろしたことで、無意識に

抑えていた疲労感がどつと襲ってきた。もう自分の意思では立ち上がることができないだろう。足に力を入れようとしても、込めた力がどこかへ漏れ出しているように芯が入らない。

だがさつき電話で連絡はしてある、俺が鍵を開けようが開けまいが勝手に入ってくるはずだ。時間がたつて気持ち落ち着いた頃、胸の内から湧き水のように徐々に、しかし確かに湧き上がってくる後悔と、大事なものが抜け落ちたような欠落感。

無意識のうちに頬に雫が伝い、心臓が早鐘を打つ。小刻みに震える手でくしゃくしゃになっているであろう顔を覆った。声にならない嗚咽と、喧しくドアを叩く音だけが、静まり返った家に響いていた。

2.

思ったよりも短かった刑期を勤めあげ、紅葉が街路を埋める頃に俺は塀の外へ出された。薄っぺらい布で作られたロングコートが寒空の風で緩やかになびく。彼女の髪も、風が吹けば同じように柔らかく舞っていたことを思い出す。

二人の監視員が警護する門を抜けると、初老の男性が一人でこちらを見つめていた。

射抜くような鋭い視線で、真っ直ぐに俺を見据えている。見知ったその顔に懐かしさと後ろめたさを覚え、交差する視線を逸らすように会釈をする。

「お久しぶりです」

「ああ」

短くそれだけ言うと、彼は踵を返して一人歩き出した。数歩分の間隔を維持しながら、彼の進む軌跡をなぞるように俺も歩みを進める。

秋の風は人通りの少ない昼間にも寒々と吹きつけ、肌に残る冷たい渴きがいずれ来る冬を否応無しに意識させる。

かつて義父と呼んだ彼の足取りは鉛のように重かった。監獄から二百メートルほどしか離れていない駐車場に辿りつくまでがいやに長く感じた。

見覚えのないシルバーの乗用車は持ち主の背中と同じように少しくたびれ、車体の底の辺りは赤茶けた錆が目立っている。少々痛んだ外観から推察するに、俺が服役を開始して間もなく手にしたもののようだ。最初の一言以降会話もないまま車に乗り込む。お互いのシートベルトの着用を確認するとセルが回され、眠っていたエンジンが弱弱しい唸りをあげて蘇る。

流れるラジオの音だけがこの重苦しい空間を取り持っていた。パーソナリティの陽気で軽快な語り口が今はありがたい。

「迎えに来ていただけなのか、半信半疑でしたよ」

沈黙に耐えかね、思ったままの言葉が口をついて出る。視線を前に向けたまま、そうか、とだけ言うと会話は途切れた。表情を変えずにハンドルを握る横顔は、俺が記憶している姿よりもずっと老けて見えた。

八年もたてば人は変わる。年齢を重ねるほどその度合いは顕著になっていく。今年の冬で還暦を迎える彼の顔には深い皺が刻まれ、髪はその面積の半分ほどがまばらに白く染まっていた。ハンドルを握る手も少し筋肉が落ち、以前よりも骨格の隆起がわかりやすく見て取れる。

後続の車が居たならば間違ひなく渋滞の元になるであろう、徹底した安全運転で一時間ほど走ると、目的の場所に到着する。

街を一望できる高台は爽やかな風が吹きぬけ、周囲は緑の茂る開放的な立地だった。ここに彼女は眠っているという。先日訪れたばかりだという彼の案内を受けて少し歩くと、見慣れた姓が刻まれた墓石が佇んでいた。

久々の行為に戸惑いながらも火をつけた線香のその香りは、その身が茶毘に付したことを強烈に実感させてくる。手を合わせ目を閉じると、様々な情景が想起される。

どれほどの時間そうしていただろうか。数分にも、数時間にも思える祈りの時間を終えたとき、先ほどまで後ろに立っていた彼の姿はなかった。

3.

気を利かせたのか、それとも胸に去来する何かがあったのか、彼は一足先に車に戻っていた。

そのまま車で今も残されている我が家へと送り届けてもらう。やはりというべきか、車内は終始無言だった。ここままで、彼に依頼した要望は全て満たされた。

「今日はありがとうございました」

入り口を開錠した後、彼に鍵を手渡し、そこで別れる。最後まで表情や態度が一貫していたのが救いだっ

人死にがあつた以上、恐らく売りに出しても買い手はつかなかつただろうが、念のため家は自分の名義のまま保持しておいてもらった。

彼女の墓参りを済ませ、帰る場所にたどり着いた。あとは義父と交わした約束を果たすだけだ。内から鍵を閉めると本能的に電気スイッチに手が伸びる。音だけが響くが、当然電気は灯らず薄暗い廊下が続いていった。彼女が最後を迎えたりビングを通り、かつて寝室だった部屋を目指す。

予想外なことに、思っていたよりも家内は整然と整えられており、埃ひとつない完璧な状態を保持していた。この様子だと、恐らく昨日のうちに一通り掃除したのだろう。過度に汚す心配がないことに改めて胸を撫で下ろす。

寝室も同様だった。あまりの変わらなさに、まるで八年前に戻ってきたように錯覚にとらわれる。ベッド脇の棚に目をやると、備え付けた目覚まし時計もそこにあつた。もつとも、とうに電池切れで活動を停止していたが。

綺麗に敷かれたベッドに力なく腰掛け、深呼吸で気持ちを落ち着けて心の準備をする。懐から取り出した小瓶のふたを開けると、力を込めすぎたか勢い余ってフタが手から零れ落ち、地面と衝突して軽い金属音を立てた。拾い上げるのに伸ばした手を止め、手皿を作って瓶の中身を受け止める。どうせもう閉める事はないのだから、落ちたままでもかまわない。

一粒、二粒、三粒……。左手に乗せた錠剤を一つずつ右手で口に運び、唾液と絡め、意を決して飲み込んでいく。次第に唾液の出が悪くなって口内が乾いてくるが、乾ききった頃には滑らかに喉に入り込んでいくので寧ろ好都合だった。

半分ほど飲み込んだ頃から徐々に意識が不安定になってきたが、手は脳を介さず動いているかの如く、クレインゲームのような単純動作を繰り返す。ドラマでは手にあけた錠剤を一気に何粒も飲み干していたが、物を飲み込むのが苦手な人間にはとても真似のできない行為だった。

俺からすれば、今こうして錠剤を流れるベルトコンベアの如く、流れるように喉に投げ入れている事自体が奇跡的なのだ。

錠剤のほとんどが左手で形作った手皿から消えた頃、ついに体を起こし続けることもできなくなり、力を失った上半身は倒れるようにベッドに沈んだ。

「あなたって、本当に薬を飲むのが下手ねえ」

突然頭に響いた声に驚き、ぼやけかけた瞳が正常な視界を取り戻す。目に映るのはすっかり暗闇が支配した部屋の天井だけ。わずかに残った体力で首を左右に動かして部屋を見渡しても、声を発する者の姿は無かった。

混濁した意識のせいで、幻聴でも聞いたのだろう。ふっと気を抜くと、覚醒した意識が一気に緩んで泥沼のようなまどろみに浸かっていくのを感じる。

目の前が再びモザイクに包まれると同時に、右手が最後の一粒を口に投げ入れた。鮮明さを失って揺れる世界がゆっくりと回りだす。浮遊感に抱かれて回転する光景は、現実から離れていく自分を意識させる。意識が沈みかけたとき、まるで漫画の吹き出しのように、視界の一部分だけがくつきりと何かを映し出しているに気がつく。

あれはまだ付き合っていた頃。風邪をこじらせて布団から起き上がれなかった俺を看病に来てくれた時

の光景。さきほど聞こえたのは、風邪薬をなかなか飲み込めずにいた俺を見た彼女の声。

走馬灯のように、過去の記憶が一つずつ浮かんで消えるのを繰り返していく。そのほとんどは、彼女が微笑んでいるもので占められていた。半身が削り取られたと紛うほどの欠落感が胸を支配する。今わの際、改めて自分が奪ったものの尊さを認識した。

回っていた視界が歪んでひしゃげ潰れるのと、かろうじて開いていたまぶたが閉ざされる瞬間はほぼ同時に訪れ、肢体は重力に逆らう力を失って一層ベッドに深く埋もれる。

頭を指すようにして、手足の末端からゆっくりと感覚が失せていくのが感じられた。

感覚の喪失が首まで到達した頃、閉じた目尻からすつと涙が一滴だけ、指先で撫でるように頬を流れる感触が伝わる。

肌を伝うその行方を見届け終わる前に、薄らいだ意識は夜の暗闇に溶けるように掻き消えていった。

補足っぽいアレ

文字数・4415文字

テーマが「過去」。正直言ってテーマに沿ってるか書いてる本人もわかってないんですけど。

人生って大体いい事と悪いことが半々ぐらいの割合で起こると思うんだけど、過去とか思い出をほじくりかえすと

優先的に「あの頃は良かった」類の記憶が掘り起こされると思うのね。

全てが良い思い出じゃないはずなのに、時間がたつにつれてどんどん美化されていって、良い思い出の割合が増える。

ゲームでよく言われる「思い出補正」に近い感じ。題名もそのまま。

今回書いたのの主人公がまさにその典型で、絶対喧嘩とかすれ違いがあったらうに思い浮かぶのは良い記憶ばかり。

勝手に過去を美化して、今に思考を戻したときに「何であんなことしちゃったんだろう」って修造みたいな後悔してる人。

皆そんなもんだと思うんですけどよね。今、から眺める過去はちよつと綺麗すぎるっていうか、美化されすぎっていうか。

何書いてるかわかんなくなってきた。そういう感じで、一応テーマに則ってると思い込ませてくれ。

突貫工事な出来のうえ、
メ切りは思いつきり過ぎたけど、
感想日前ってことで許して！